

Grosse Messe (1739) für Bach und Luther

(バッハとルターに捧げる大ミサ 1739)

a transcription for singers and baroque orchestra
based on the 'Dritter Teil der Clavierübung' of J.S.
Bach

J.S.バッハのクラヴィーア曲集 第3部を元にした
歌とバロックオーケストラのための編曲

by

Wouter Dekoninck

解説 ワウター・ドゥコーニンク

訳 中丸まどか

クラヴィーア練習曲第 3 番について

時は 1739 年。ライプツィヒの町は歓喜に満ち溢れている。ちょうど 200 年前の 1539 年にマルティン・ルター自らがここ聖トマス教会で歴史上重要な説教を挙げたのだ。

聖トマス教会の楽長、ヨハン・セバスチヤン・バッハはルターの思想にひじょうに感銘を受けていた。彼はマルティン・ルターの神学的書物に自らの覚書を入れつつ、それらを自分の蔵書に収集していたのである。

バッハがクラヴィーア練習曲集第 3 部を 1739 年に出版したのは全くの偶然ではない。そこに書かれたコーラルプレリュードはルターの神学的、そして音楽的なテーマを用いたものだ。ここでポイントとなるのはルターもまた音楽家であったという事実である。

この練習曲集第 3 部にはルター派のミサ(キリエ・グロリア)、ルターの信条告白(十戒、使徒信条、主の祈り)、2 つの礼典(洗礼と主の聖餐)そして信仰告白が含まれている。これらの作品は、記念碑的な祝福に満ちた 3 段重ねのプレリュードで幕を閉じる。

クラヴィーア練習曲集第 3 部ではまた、バッハの時代とそれ以前の西洋音楽のスタイルの流行をじっくりと俯瞰することが出来る。スタイル・アンティコ(古い様式-16 世紀のポリフォニーとプレスコバルデイのオルガン曲集「音楽の花束」に見ることが出来る)とスタイル・モデルノ(新しい様式)。この様式のミックスは口短調ミサにも見られる。フランス様式(フランス式序曲、ニコラ・ド・グリニーによるフランス式のオルガン技法)、北ドイツ派の影響 - ダブルペダルテクニックと呼ばれる足一本ずつが独立してそれぞれが別々の旋律を弾く技法(ブクステフーデ、ベックマンに見られる)、さらには手鍵盤のみで独立したメロディを弾く南ドイツ派の影響(パツヘルベルに見られる)、バッハはそれらの要素全てをこの作品集に取り込んだのである。

さらに構成全体を一貫しているのはバッハに特有の象徴的数字である。彼の作品には聖書をあらわすものが象徴としてちりばめられている。例えば 3 という数字は三位一体(父、子、聖霊)を表している。アウグス

ベルグ信仰告白はルター派の三位一体を信じるという事に基づいており、この曲集の最初のプレリュードと最後のフーガが3つのテーマから構成されていることは全くの偶然ではないと言えるだろう。

バッハとルターに捧げる大ミサ 1739 について

バッハが作曲した全てのクラヴィーア曲集(イタリアンコンチェルトやゴールドベルク変奏曲を含む)の中でクラヴィーア練習集第3部は知名度という点において一番マイナーな曲と言えるだろう。せいぜい良くて時折オルガニストがコンサートのプログラムに抜粋した数曲を入れるのが関の山である。

ワウター・ドウコーニクはそのクラヴィーア練習曲第3部を自らの手に取り、今日の人々のもとへ届けるべく新たに命を吹き込んだ。しかしバッハ自身の語り口を継承する形で。

ドウコーニクは、オルガンのスコアをよりメロディが流れるようにバロックオーケストラにアレンジし、そこにルター自身によるコラルの歌詞を取り入れ、その歌詞と音楽をもとに歌のラインを入れた。その結果、歌とバロックオーケストラのための記念碑的なドイツミサ「バッハとルターに捧げる大ミサ 1739」が誕生する事になった。この作品はまだ誰にも演奏された事はない。大編成のバージョンは弦楽器(ヴィオラダモーレとヴィオラダガンバも含む)、フルート、オーボエ(オーボエダモーレとオーボエダカッチャを含む)、ファゴット、トランペット、ホルネット、トロンボーン、ティンパニ、オルガンから成っている。

編曲の段階で細心に注意を払い、また入念なケアを持って行ったことは、編曲の結果がバッハのスタイルと精神をしっかりと保持する事である。ワウター・ドウコーニクは、まずクラヴィーア練習曲第3部に用いられたすべてのスタイルを、そしてさらにはカンタータ、ミサ曲、器楽曲、バッハ自身による他の作曲家の編曲をまんべんなく研究した。

これによってバッハのオーケストレーション、歌詞の使い方、楽器の使い方、そしてその全ての要素が何を可能にし逆に何が限界となるのか、それらをしっかりと把握する。それと同時に、バッハがこの作品を構築

したその根底に流れる精神、そのカギとなる人物であるルターの人生についても学んだ。

「バッハとルターに捧げる大ミサ 1739」というミサにちなんだ名前が付いた理由は、この作品にミサに含まれる要素が集まっているからと言うだけでなく、クラヴィーア練習曲集第3部は歴史的にも「ドイツミサ」または「オルガンミサ」と呼ばれていたからでもある。またこの曲名は類似した要素のある口短調ミサ曲に呼応しているものとも言える。例えばスタイル・アンティコとスタイル・モデルノの使用、そして様々な楽器を大編成で用いているポイントなどである。

しかしながら口短調ミサと対極を成す点は、「バッハとルターに捧げる大ミサ 1739」はルター自らによる、またはそれにちなんだコラルの歌詞で構成されていることである。それぞれの曲はルター派の典礼かルターの信仰問答書から作られたコラルを用いてアレンジされた。バッハのミサ曲がすべてラテン語で書かれているのに対し、ドウコーニクが自らの編曲にドイツ語を使用したのは言わずもがなであろう。バッハは例外を許さず全ての曲に定旋律を用いて作曲する事を妥協しなかったが(最初と最後の曲を除く)様々な様式を使う事、またバッハの作曲技法によって、この曲集はひじょうに色鮮やかで豊かなものに仕上がっている。ドウコーニクはさらにいくつか器楽曲のシンフォニアを取り入れ、それらを歓喜あふれる作品に塗り直した。ひじょうに特徴的な構成をもったこのバッハの作品は、口短調ミサと肩を並べるものであると言える。よってそこから誕生した「バッハとルターに捧げる大ミサ 1739」はバッハの作品を取り巻く中でいっぼう風変わりな立ち位置を得ることになるであろう。口短調ミサのような、またはヨハネ受難曲やマタイ受難曲のような。それゆえにひじょうに興味深いものに。

解説 ワウター・ドウコーニク

訳 中丸まどか